

One Purpose! 山梨にもたらされた新島襄のスピリット

山梨英和大学 宗教主事 大久保 絹

新島襄と山梨：同志社校友会山梨県支部

みなさんは新島襄と聞き、まず何を思い浮かべるでしょうか。新島襄が残した言葉、新島襄にゆかりのある場所、新島襄の教育、新島襄の仲間、新島襄の人柄など、新島襄という名前から思い浮かべることは、それぞれ、そしてさまざまでしょう。私は、このオンデマンド講演会の動画を山梨県で作成しています。京都から400kmほど遠く離れた山梨には同志社校友会山梨県支部があり、1年に3～4回ほど、校友同士で集まる機会があります。校友会の交流を通して、京都から離れた山梨でも母校を身近に感じる事ができています。今回、Doshisha Spirit Week 2024 秋のオンデマンド講演会でお話しすることになり、山梨県支部のみなさんに協力していただきました。そこで冒頭の問い、新島襄と聞き、思い浮かべたことを、山梨県支部の校友のみなさんに教えていただきました。その中から、いくつかのエピソードをご紹介します。

校友のエピソード：生きている同志社スピリット

まずはじめのエピソードです。1954 年4月に同志社大学経済学部に入學した校友の方のお話です。当時の在籍者は 500～600 名。そのうち女性は5名ほどだったそうです。「良心の全身に充満したる ^{ますらお} 丈夫 ^{きた} の起り 来 らん事を」という新島襄の言葉が一生の言葉になっており、数少ない女学生と共に良心碑をバックに記念撮影をした思い出も話していただきました。「良心が咎める」という言葉があるように、良心というものは神さまではないか、と考えるおられることもお聞きしました。

次のエピソードは、^{そうとりょう} 壮図寮 1期生からお聞きしました。「壮図を抱きてこの春を迎える」という新島襄の言葉から名づけられた神学校の寮で過ごし、いつも新島襄を背負って神学生時代を過ごしていたというお話しです。栄光館で開かれた大会で神学生が「新島襄の生涯」という劇をした興味深い話も聞き、同志社の自由な校風が表れていると感じました。

3つ目は、同志社大学経済学部在学中、E.S.S (English Speaking Society) に所属し、キャンパス内では英語を使い、卒業して2年後、単身でアメリカへ渡ったというエピソードです。函館から脱国し、渡米した新島襄と自分のライフを重ねることがあり、ニューヨークでは同志社校友会に出席し、新島襄の志と同志社の精神を分かち合う時間だったと聞きました。これは亡き私の父の話です。

4つ目は、文学部文化学科で心理学を専攻され、教員として34年教育に携わったのち、

現在でも山梨英和こども園の園長というかたちで教育に情熱を注いでいる方。在学中は洛西教会の礼拝に出席していたとのこと。

5つ目は、山梨英和高等学校を卒業し、神学部へ。在学中、「函館キャンプ」に参加し、新島襄の足跡を辿り、新島襄のファンに。京都から日本海沿いを進む寝台列車で函館へ行き、途中の青森駅のホームで、青森の校友会の方たちの歓迎を受け、りんごジュースを手渡してくれたその暖かさに感激し、全国、世界に広がる同志社の交わりに感動した、というエピソードです。

これは実は私の体験です。私は神学部と神学研究科を修了し、同志社女子中学校・高等学校、同志社国際中学校・高等学校で嘱託講師を務めたことをきっかけに、校祖墓参など、新島襄をおぼえる行事に参加できたことも恵みでした。その後、牧師となり現在は山梨英和大学にいます。職場では同志社礼拝堂が描かれた同志社グッズのマグカップを使い、日々同志社スピリットを思い起こしています。

この講演にあたり、校友会山梨支部のみなさんのエピソードをお聞きし、それぞれの時代に、それぞれが同志社で学生生活を送られ、同志社での出会い、学んだこと、経験がその後の生き方に表されていると感じました。また校友のみなさんの多くが、新島襄の言葉を座右の銘としておられることもわかりました。同ったエピソードから、同志社の教育の柱である、良心教育、自由主義、国際主義、キリスト教主義を感じることができ、今も新島襄のスピリットや同志社の精神がそれぞれに流れ、浸透していることに感動しました。

山梨英和のルーツ(Roots)と同志社

先ほど私は「山梨英和中学校・高等学校の卒業生で、山梨英和大学にいます。」とお伝えしました。山梨英和学院は3つのこども園、女子中高、大学、大学院があります。また東洋英和女学院、静岡英和学院、山梨英和学院は、それぞれカナダ・メソジスト教会をルーツにもつ姉妹校で、このつながりを「三英和」と呼びます。私が山梨英和中高在学中は「三英和交流会」という交流を楽しむ機会もありました。

山梨英和学院の母体となる山梨英和女学校は1889年に創立しました。初代校主、新海栄太郎と初代校長 S.A.ウイントミュート

は、共に25歳でした。この若いエネルギーによって、6名の生徒を迎え、女子教育の場としての山梨英和女学校が開校しました。同志社は1875年に8名の生徒と2名の教師、新島襄と J.D.デイヴィスとでスタートを切りました。同志社英学校が創立され、その14年後に山梨英和女学校が設立され、今年が創立135周年となります。

このように同志社と山梨英和を比較した理由は、山梨英和の設立に、新島襄の精神や同志社の精神が影響しているのではないかと、私は考えているからです。では、まず、山梨英

和の創立者の新海栄太郎とキリスト教についてお伝えします。新海栄太郎がキリスト教と出会ったのは、「蒙軒学舎」という私塾であり、山梨県の南部町にありました。山梨県内はもちろん、静岡、神奈川から学ぶものも多く、塾生の要望によって、1877年、カナダの宣教師、C.S.イビーを招き、直接英語が教えられました。山梨県の教育史上画期的なことであり、山梨におけるキリスト教伝道のきっかけともなりました。この蒙軒学舎で学ぶことができたのは、財産家の子息たちであり、修学年限は4ヶ年。漢学、英学、数学の3科目と詩文、筆蹟などを学んだと言われています（青少年のための山梨県民会議編『郷土史にかがやく人々 第2集』青少年のための山梨県民会議 1969年 p.71-72）。高度な教育内容であり、教授陣も著名人であったという記録があります。数学の教師、石原直太郎や英語の教師、近藤麟太郎はいずれも同志社出身でした。宣教師 C.S.イビーを通して、蒙軒学舎で学んだ塾生たちの多くが、キリスト教信仰、キリスト教思想を受け、山梨近代化推進の指導者的立場について、各分野で活躍していったのです。創立者の新海栄太郎がキリスト教に触れ、1888年に洗礼を受けるまでの求道生活、いわゆるクリスチャンになるまでの過程についてはわからないことが多いです。多いとはいえ、C.S.イビーとの出会いによることは明らかでしょう。またもう一つ大きな出来事として、同志社との関わりがあります。それは、新海栄太郎の弟、新海家の次男であった新海祐六が、1886年から同志社に在学していたことです。

新海栄太郎・祐六兄弟：それぞれの入信と洗礼

新海栄太郎の弟、新海祐六について、祐六の生涯を5つに分け、お話しします。第1期（1872年～1886年）は、山梨県・玉幡村に生まれ、14歳まで過ごした幼少期。第2期の同志社在学時代。祐六がキリスト者へと導かれ、キリスト者としてのアイデンティティーを確立させていった時期です。第3期（1892年～1896年）は、札幌農学校在学時代、第4期（1896年～1924年）は、実業家、村会議員時代です。第5期（1924年～1953年）は、山梨英和との関係となります。

祐六は、1924年に山梨英和の評議員に就任、1935年から1953年まで18年にわたり、山梨英和女学校の校主、理事長をつとめ、29年にわたって山梨英和女学校を支えた人物でした。

次に、兄・栄太郎と弟・祐六を同志社との関係を照らし合わせてみます。祐六は14歳から20歳まで同志社で学びました。16歳のお正月、父の危篤の連絡を受け、山梨へ戻り、しばらく山梨にとどまりますが、その後、再び同志社に在学しました。父の危篤の知らせを聞いた際、京都の旅館柊屋のお抱えの車夫を付き添いに山梨へ、船、人力車、汽車、徒歩で昼夜兼行の旅を続け、東海道・岩淵宿から大雪の中、富士川沿いに山梨に入り、臨終には間に合ったそうです。いまのように簡単に新幹線に乗れば故郷に帰ることができるという時代ではなかったため、山梨を離れ京都で学んでいたことはとても恵まれていたことがわかり

ます。

再び、京都に戻り、学びを再開した祐六のもとを、兄・栄太郎が時折訪ね、同志社を訪れたという記録があります。そして、同志社のチャペルにおいて兄・栄太郎に「忽然入信の奇跡」があった、とされています。クリスチャンとなる奇跡があった、ということです。そればかりでなく、この奇跡は、「甲州基督教布教史上特筆すべき奇縁」ともされています。兄・栄太郎は、同志社で新島襄の説教を聞いたことをきっかけに、1888年12月2日、甲府教会にて「山中笑」牧師より洗礼を受けたのです。栄太郎が洗礼に導かれた背景に、新島襄と同志社が大きく影響し、またそののち、弟の祐六も洗礼に導かれたのでした。

新島襄の説教とその生き方

新島襄を通して語られた聖書の言葉、そして新島襄の説教は、どのように栄太郎に響いたのでしょうか。山梨から上洛し、活気に満ち溢れた同志社で聞く説教は、栄太郎にとって極めて新鮮なものであり、熱意のこもった新島襄の語りに惹きこまれていったのではないのでしょうか。そして入信への準備が備えられていったのでしょうか。

新島襄の説教が兄・栄太郎の信仰者としての歩みに影響を与え、さらに弟・祐六も、新島襄との出会いによって、翌年に洗礼を受けました。直接的な交流があったかどうか、知ることはできませんが、国禁を犯して脱国し、アメリカへ渡り、キリスト者となり、在野から日本の変革に貢献しようとした新島襄の存在そのものが、栄太郎と祐六のその後の生き方にとって決定的に重要な契機となったと言えるのではないのでしょうか。

栄太郎の受洗から3ヶ月後、1889年3月に祐六が洗礼を受け、兄弟は住む場所を山梨と京都と異にしながらも、新島襄によって蒔かれた信仰の種を芽生えさせ、互いに影響を与え合いながらキリスト者としての歩みを進めていったのではないかと思います。

新海祐六在学中の同志社

祐六は同志社で学ぶ中、キリスト教に深く傾倒し、同志社教会で金森通倫から洗礼を受けました。3月24日の出来事です。この日の受洗者は98名にも及びました（記念事業実行委員会『同志社教会員歴史名簿』日本キリスト教団同志社教会 1996年p.34）。

祐六は同志社においてどのような日々を過ごしていたのでしょうか。祐六と同じ日に同志社教会で洗礼を受けた一級下の三宅麒一は当時の様子を次のように記しています。

毎朝7時半からチャペルで朝会が行われた。徳育や宗教、外国の話など有益で見識を広めるには好機会であった。夜は相国寺境内の松林の中でよく祈祷会をした。日曜日は、

説教の前にグループで聖書講義を行う日曜学校があり、そのあと礼拝となった。小崎弘道先生や西洋人の先生などの説教があった（同志社社史資料室『創設期の同志社－卒業生たちの回想録－』同志社社史資料室 1983 年 p.148-157）。

早朝、チャペルでの礼拝、その後の授業、夜には相国寺で祈祷会を行い、日曜日は、グループになって聖書講義を行う日曜学校、そしてその後に礼拝を守ったとあります。ここに記されている小崎弘道先生は、同志社で学んだ後、東京の霊南坂教会や東京キリスト教青年会（YMCA）を創立し、『^{りくごう}六合雑誌』を創刊した人物です。キリスト教伝道に力を注ぎ、新島襄亡き後、第二代同志社総長となりました。若き祐六は、その時代の小崎弘道先生との交流があったことがわかります。

また祐六と在学が重なった三上真吾（1891 年 6 月普通科卒業）は、当時の同志社の気風を次のように記しています。

同志社の教師の大部分は米国の宣教師で、多くはニューイングランドから来て正教徒主義を鼓吹していた。その結果ピューリタンリズム或いはストイックの精神を養成された。また同志社はピューリタンとかストイック派の如く、極めて精神的の教育をする所であつた故、飲酒喫煙を禁じて居たのみならず、（中略）風儀として、芝居、寄席等は厳禁されて居た。（同志社社史資料室『創設期の同志社－卒業生たちの回想録－』同志社社史資料室 1983 年 p.206-210）

このように三宅麒一や三上真吾の記述から、当時の同志社では、毎朝チャペルで早天祈祷会があり、夜は友と互いに祈り、日曜は礼拝に集うだけでなく聖書講義を行っていたことから、教職者主導ではなく、信徒それぞれが自ら求めて、キリスト教信仰が自然と育まれる日常的な環境があったことがわかります。それはキリスト者の信仰生活を実践する場ともなり、祐六はこのような精神風土の中でキリスト者として感化を受けていたのではないのでしょうか。

祐六が洗礼を受ける半年ほど前の 1888 年 10 月、学生数は着実に増えており、同志社英学校は 426 名、同志社予備校は 203 名、神学校は 81 名、女学校は 176 名、看病婦学校は 13 名、合計 899 名の学生が在学していたことがわかります。祐六は 1886 年、同志社英学校が開校して約 10 年が経過したときに入学しました。その年は新島が同志社の基礎であり精神であるとしたチャペルが完成し、キリスト教を根幹においた教育がますます充実する時期に祐六は同志社での学びをはじめたことも、意味深いものだと感じます。

さらに深堀すると…

祐六の息子・新海道哉さんは、「父が尊敬していた先生は、新島襄先生、浮田^{かずたみ}和民^{わみん}」

先生、金森通倫先生」と三人を挙げています（新海道哉編『新海祐六 咏藻拾遺』1971年 p.30）。ここに挙げられた浮田和民先生と金森道倫先生は、いずれも熊本洋学校の学生でした。1876年、熊本洋学校の閉校によって、同志社でL.L.ジェーンズが教えるようになったことをきっかけに、洋学校の学生たちも熊本から京都に移り、同志社英学校の学生となりました。彼らは「熊本バンド」と呼ばれ、同志社英学校にとって大きな存在となりました。

祐六は金森通倫との関係が特に深かったのではないのでしょうか。金森通倫は、同志社教会に仕え、牧者として同志社に連なる人たちの信仰を支えていました。金森通倫がそのように生きた背景には、新島襄との出会いがあったことは言うまでもありません。熊本洋学校から同志社英学校に入学し、数ヶ月で新島襄から洗礼を受けたことから、新島に深く傾倒していたのではないかと感じ取れます。その金森通倫が同志社に戻ってきた1886年に、祐六は上洛し、同志社に入学しました。金森通倫が同志社で活躍する時期と、祐六の在学期が重なることから、祐六が日常的に接していた人物と言ってもよいのではないのでしょうか。金森通倫は、1890年に同志社を離れます。離れた理由は色々あったと言われていますが、祐六もまた1892年に同志社を卒業せず、札幌農学校へ移ります。金森通倫が同志社から離れたことも影響したのかもしれませんが。

新島襄の葬儀

祐六が尊敬していた先生として浮田和民と金森通倫を挙げましたが、祐六がもっとも影響を受けたのは新島襄です。新島襄は1890年1月23日、療養中の大磯で妻の八重の腕の中で息を引き取り、46歳11ヶ月の生涯を終えました。翌日24日午前1時20分、新島襄の棺は、京都の七条駅（現在の京都駅）に到着し、約600人が出迎えたという話があります。その中に祐六もいたという記録が、祐六の息子・新海道哉さんが記した、父、新海祐六の回顧録に記されていました。

私は同志社国際中学校・高等学校で非常勤講師をしていた際、新島襄の生涯を中学生のクラスで共に学びました。その授業の中で「夢半ばにして、妻、八重の他に徳富い猪一郎いちろう、小崎弘道が臨終の場に立ち合った。その翌日京都駅で学生たちが待っていた」と生徒に話したことがありました。のちにその学生たちの中に、山梨の祐六がいたことを知り、大変胸があつくなりました。棺を出迎えた学生たちは、クラスごとに順番に棺を担ぎながら新島襄の自宅まで運び、27日の葬儀のあとも、棺は学生たちによって若にや王子おうじ山頂の墓地まで運ばれました。同志社チャペルでの葬儀の参列者は約4000人に及び、祐六はどのような思いをもって葬儀に参列したのだろうかと思いを膨らませました。

新島襄、浮田和民、金森通倫という師を通して、祐六は会衆派教会の伝統的エートスである「自由・自治」の精神風土の中で青年期、同志社時代を過ごしたと言えるかもしれません。

山梨英和のはじまり：新島襄の女子教育論と地方教育論

さて、再び山梨英和に焦点をあててみましょう。祐六の兄・新海栄太郎によって創立された山梨英和は、甲府教会の青年たちとカナダ・メソジスト教会の宣教師が教育に携わりました。先に記したとおり、新海栄太郎は、京都で新島襄の説教を聞き、感銘を受け、その出来事を「入信の奇跡」と表しました。1888年12月に洗礼を受け、キリスト者としてあゆみ、その翌年、山梨英和女学校を設立しました。設立の背景に、栄太郎は山梨県の女子教育機関の不備を嘆いていたと記されています。

当時栄太郎は、山梨県内の女子教育機関の不備を嘆いていたが、なかなかこの仕事に踏み出せなかった。文明開化の時とはいえ、まだ旧弊な考えが残っていた時代である。ところがある夜、栄太郎の枕もとに「まぼろし」がたち、「これからの世の中には女子の教育を認めていかなければなりません。良い母、良き妻、良き女性に成長させるためには必要です。またそれといっしょに世の中も繁栄をみるのです(『山梨のいしぶみ』山梨日日新聞社 1977年 p.37)

という女子教育への啓示がありました。

三晩、続けてそのことばを聞いた栄太郎は、女子教育の発展のために大きな決意を持って踏み出しました。広く寄付を募り、1889年4月、山梨英和女学校を創設したのです。

新島襄は女子教育と地方教育を大切にしていました。女子教育については、10年に及ぶアメリカでの生活ののち、改めて日本女性をみたとき、あまりにも閉鎖的で不平等な社会に置かれていると驚いたことが根底にあるのかもしれません。新島襄の女子教育への熱意を感じる講演草稿を記します。

「梅花女学校における女子教育」

西人の曰く、「教育は社会の母なり」と。(中略)予は曰わん、「女子教育は社会の母の母なり」と。(中略)終りに臨み、予はこの校の女生徒に向かい、一言なき能わず。今兄弟方ご尽力によりこの校の設けありしは、他なし、善良なる、有益なる婦女子の輩出して、社会の塩となり、光とならん事なり。また有志諸君の己れの財を吝まず、これを投じてこの拳を助けられしも、他なし、女子の改良を望みて社会の改良を計らるる為ならん。(同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波文庫版 2010年 p135-137)

このように、新島襄は女子教育の大切さをまとめています。教育を受けた女子が、社会の塩となり、光となる、という言葉は感動させられ、励まされます。そして女子教育が社会を改良するとも伝えています。女性の生き方が変わることが、地域社会の、そして日本社会の、ひいては世界のあり方を変えるという新島襄のスピリットは、今を生きる私たちが継承すべき課

題であると感じます。

次に「地方教育論」について共有したいと思います。

教育に付いて論ずるに何の差別もあるまじきに、何故^{なにゆえ}地方教育論を^な為すかを問えば、答えて曰^いわん、我国の教育の如^{ごと}きは、東京、中央に集まり、何学も中央に行かねば学問のなき事に成行き、又中央の地に於^{おい}て受ける所の悪風は、生徒を腐敗せしむるに口し。これを薰陶^{くんとう}し、これを養生するに、勢力の乏しき事あれば、今日の勢いを^{もつ}以て論ずれば真正の教育を地方に^し布^くに如^{ごと}かず。(中略)卒業の上は一通りの教育を受けたる人となり、地方にまいり、如何^{いか}なる役も勤まり、県会議員なり、一会社の長なり、一の農家の戸主なり、一通りの学問ある上は、縦令^{たとい}無事の日には日向^{ひなた}にあり、各々の家業事を預かるも、一旦^{いったん}事あるときは地方の率先者となり、村落の骨となり、教会の基^{もと}となり、自由を皇張し、又物産をすすめ、人々にもよき手本を示し、学者たる者は^{みづか}自^{みづか}ら尊大にあり自ら先生となるにあらずして、却^{かえ}って身を社会の犠牲となし、社会の進歩を計るの人を養成せば、我が国何ぞ振るわざる、我が民権の起きざるを憂えん。(同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波文庫版 2010年 p.85-86)

新島襄はこのようにまとめています。新島襄は、高等教育の機関が東京にあり、人も集まっていることを指摘し、地方の有志の力によって設立され、運営される教育の場の必要性を伝えています。また、「民権の養成所はこのコレジにあり」という言葉もありますが、「民権」、すなわち、「自由・自治」とも通じるところのある「民権」、その養成は、地方の小規模の「私学」にあるとしています。これは、新島襄自身が、ワシントンからも、ニューヨークからも、ボストンからも離れたところにあるアーモスト大学で学んだことが、この主張の背景にあったのかもしれません。

新島襄のスピリットを山梨へ

新島襄の「女子教育論」と「地方教育論」に触れると、地方の女子教育に生涯をささげた新海栄太郎と祐六兄弟の生き方は、この新島襄の精神を引き継いでいると感じます。兄・栄太郎は、山梨英和女学校の創立に力を注ぎ、同窓会を発足させました。また村長、県議会議員として村政、県政にも貢献しました。銀行の取締役やその他いくつかの会社の要職を歴任しました。弟・祐六は、同志社を卒業せず、20歳になり北海道へ移り、札幌農学校で学びました。札幌農学校から山梨に戻り、24歳の若さで製糸工場を開業し、実業家として活躍しました。組合にも関わり、村会議員、青年会会長なども勤めました。そして、山梨英和女学校の評議員、校主、理事長を務めました。まさに新島襄の生涯が示した通りの生き方を新海栄太郎と祐六はしていたことがわかります。

1886年、14歳で山梨から京都、同志社へ行き、1892年～1896年までの4年間、札

幌農学校で学び、そののち祐六は山梨に戻りました。山梨においては「一人の信徒」としてキリスト教の伝道に力を注ぎました。この祐六の働きは、信徒が中心となって教会形成を行う、会衆派教会の一つの信徒運動ではないかと感じます。祐六は会衆主義の伝統に倣う形で伝道したのではないのでしょうか。また日本において非常に早い段階に女子教育の重要性を説いた新島襄の精神を、山梨においても開花させようとしたのかもしれませんが。そのように感じるのも、教職者としてではなく、実業を営む一人の信徒として、女工員の存在を大切に、婦人伝道師の交わりの中から、聖書の言葉と出会ってほしいという祈り、信仰の種まきという使命をもって行っていたのではないかと思うからです。

「敬神・愛人・自修」：同志社スピリットと「自修」

祐六が29年間携わった山梨英和の校訓は、「敬神・愛人・自修」です。現在も私たちはこのスクールモットーを大切にしています。「敬神・愛人・自修」という山梨英和の校訓は、初めて日本人の校長として就任した雨宮敬作によって、山梨英和女学校創立50周年の年、1939年に制定されたと言われています。その当時、祐六は山梨英和に在職しており、校訓の制定に関わったのではないかと思います。この年、「財団法人山梨英和女学校」としての認可を得、第一回財団理事会が開催されました。またこの時から、カナダ・メソジスト教会の支援を受けず、理事会を発足し、日本人の校長がたてられたのです。雨宮敬作は、早稲田大学在学時、海老名^{だん じょう}弾正より受洗しました。海老名弾正もまた金森通倫と共に、同志社に学んだ熊本バンドの一人であり、同志社の総長も担った人物です。雨宮敬作は、熊本バンドの一人であり、のちに同志社総長となる海老名弾正から、祐六は熊本バンドの一人、同志社の校長となった金森通倫から受洗したのです。山梨英和で活躍した二人が、それぞれに同志社と深い結びつきのあった人物を「師」として仰いでいたという共通点は大変興味深いものです。

先に東洋英和、静岡英和、山梨英和の「三英和」についてお伝えしました。東洋英和女学院の建学の精神は「敬神奉仕」であり、静岡英和学院は、「愛と奉仕」です。このように「敬神・愛人」については、日本各地のキリスト教学校の多くが同様のものを、そのモットーとして用いていますが、山梨英和学院は「敬神・愛人・自修」を建学の精神とし、第三のモットーである「自修」は他校に類例をみないように思えます。

この「自修」という言葉には、カナダ婦人宣教師の受難の道と犠牲と奉仕の生涯が深く重ね合わされていたものと捉えられています。しかし、私は山梨英和中学校・高等学校を卒業し、同志社大学で学び、再び山梨英和大学に連なる中、この「自修」に目を向けると、祐六のキリスト者としてのアイデンティティーと深くつながっているのではないかと考えるようになりました。言い換えるならば、祐六が同志社在学時代に培った、会衆派の伝統と新島襄の思想が現わされているのではないかと思うのです。また兄・栄太郎が思い描いたビジョ

ン、またはじめての日本人の校長・雨宮敬作が培ってきたものなど、それらがこの「自修」というモットーに結実したように思えてなりません。

このような観点から「自修」の概念を見直すならば、そこに含まれる「独立自尊」の精神や、さらには同志社精神の要である「^{てきとうふき}倜儻不羈」を大切にする精神もまた、そこに幾分なりとも含まれていたのかと想像を逞しくしたくなるのです。また山梨英和女学校の校主や理事としての働きの中において、祐六の「自由・自治」の精神が様々な形で影響を与えたのではないのでしょうか。

「一人一人は大切なり」と One Purpose

今の山梨英和は新海栄太郎と祐六兄弟のビジョンを継承できているのだろうかと思いつき、思い浮かべるのが「諸君ヨ人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ」という新島襄の言葉です。この言葉は同志社創立10周年のとき、1885年12月の記念演説で新島襄が残した言葉です。この言葉の背景には、新島襄が同志社を不在中、退学処分になった生徒を心に留め、新島襄の教育の姿勢を訴え、キリスト教に基づいた教育の意義を再度表明し、大学設立に向けて歩み出したその決意が含まれている言葉です。「諸君ヨ人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ」。

この新島襄の言葉は、教育の現場にだけあてはまるものではなく、私たち一人ひとりが、この新島襄の言葉を、日々の生活で実践していくことを求められているように思います。一人一人を大切にすることは「良心の全身に充満したる丈夫」を生み出すことであり、「良心を手腕に運用する人物」に必要とされるものだと思います。

1879年6月12日、同志社英学校の第一回卒業式が行われました。卒業式の終わりに、新島襄は“Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!”という言葉を送りました。私はこの講演のタイトルに One Purpose という言葉を入れました。この One Purpose という言葉は、同志社で学んだ、学んでいる、学ぶだろうものが「ひとつの目標」に向かって進むということではありません。一人ひとりが、二度とない人生、自分のライフに、自分の One Purpose を持とう、という思いを込めました。自分には自分の賜物を生かす独立した One Purpose があるように、他の人にはその人の賜物をいかす独立した One Purpose があるでしょう。神に召された人にも、そうでない人にも、それぞれの多様な One Purpose があり、それを自主的に実現すること、それを人間の思惑を超えた神の見えざる計らいに委ねることによって、より大きな One Purpose になっていくことを信じたいと思います。このオンデマンドによる講演の機会を通して、私自身、たくさんの発見と同時に学びを深めることができ心より感謝いたします。Mysterious Hand、見えざる御手によって、講演を聞いてくださった、またこの講演録を読んでくださったお一人おひとりのあゆみが守られ、導かれることを願っています。